

片側顔面痙攣（HFS）

片側眼瞼痙攣は、顔の右半分、あるいは左半分の筋肉が無意識にぴくぴく動いて痙攣する慢性の病気です。正常な顔半分と異なり、病気の顔半分では筋肉が収縮して目が閉じたり、口角が釣りあがったりして顔がゆがみます。顔の筋肉の緊張は、短時間のもや持続するものがあり、顔の筋肉を動かすことで誘発されることがあります。中年の方に多く、男女差はありません。寝ている間も顔の筋肉は痙攣します。ストレスや不安で症状が悪化することがあり、また、ロラゼパムなどのお薬で軽減することがあります。人によっては、お酒で症状が軽減することもあります。治療としてお勧めするものではありません。

ほとんどの片側顔面痙攣(HFS)は、顔の筋肉を動かす顔面神経が脳につながる部分で血管に圧迫されておこると考えられています。顔面神経と接触している血管との間に小さいスポンジを差し込む脳外科での手術（顔面神経減圧術）で改善することがありますが、最も安全な治療法は、ボツリヌス治療です。



片側顔面痙攣



ボツリヌストキシンを投与する場所

ボツリヌス治療

ボツリヌストキシンを投与するボツリヌス治療は片側顔面痙攣に対して効果的で、顔の痙攣をおこす部分の皮下に極少量を投与すると、数日で効果が出始め、筋肉をリラックスさせて痙攣を防ぎます。また、片側顔面痙攣に対してボツリヌス治療は世界中で行われており、眼科や神経内科で受けることができます。治療にかかる時間は、5~10分程度で、外来で行われます。効果は約3ヶ月で薄れてきますので、繰り返し治療を継続することが必要になります。ボツリヌス治療で通常は合併症がおこりませんが、投与した部分の皮下出血や、まぶたが一時的に下がってきたり（眼瞼下垂）、物がだぶって見えること（複視）などがおこることもあります。

顔面神経麻痺後の病的共同運動

顔面神経麻痺後の病的共同運動は、片側顔面痙攣に似た症状をおこします。顔面神経麻痺では、障害された顔面神経が徐々に再生して通常は元の筋肉へつながりますが、誤った方向に神経が伸びて行き、本来は関係のない顔の筋肉とつながってしまうことがあります。その結果、顔の筋肉が動く時に、ふつうは同時に動かない他の顔面の筋肉も動いてしまい、顔面神経麻痺後の病的共同運動と呼ばれる状態になります。例えば、目を閉じたときに、口も同時に動いたり、また、逆に、口を動かしたり、笑ったときに目が閉じたりします。ボツリヌストキシンをこのような不都合な動きをする場所に投与すると、顔面神経の異常な活動をブロックすることができます。

よくある質問

Q ボツリヌス治療で、ボツリヌス中毒になることがありますか？

A いいえ。ボツリヌストキシンは皮下に投与するだけですので、通常は他の体の場所に影響しません。また、治療に使用するボツリヌストキシンの量は少量で、ボツリヌス中毒をおこすほどのものではありません。

Q ボツリヌス治療は痛いですか？

A 投与の際には、痛みが出ないように非常に細い針を使います。実際は、軽い不快感が数秒程度だったという人が多いようです。